研究論文

# イギリス・フェミニズムの胎動と「ブルーストッキング」の女性たち
## ――《英国近代女性作家展》に寄せて

坂本　武

関西大学図書館が収集した英国近代の女性作家たちのコレクションが、平成14年度の秋季特別展として平成14年11月７日から12月15日まで総合図書館１階展示室において一般に公開された。私はこの特別展のための展観目録を作成する機会を与えられたが、その作成過程で様ざまな感想を抱くことになった。総体的に言えばそれは、近代のイギリス女性たちの知的活動の多彩さ・豊かさであった。中でも18世紀イギリスの知的女性たちのグループである「ブルーストッキング」関係の資料は、そのような印象の中心をなすものである。

### I

このコレクションは、17世紀後半生まれのDelarivier Manley（1663－1724）やLady Mary Wortley Montagu（1689－1762）から、18世紀後半、1776年生まれのJane Austen、19世紀初期生まれのElizabeth Gaskell（1810－65）やCharlotte Brontë（1816－55）あたりまでを含めて、およそ90点の女性作家たちの作品を収めているが、その中で最も特徴的なこととして、18世紀イギリスのサロン文化の知的側面を象徴した、いわゆる「ブルーストッキング」の女性たちのものが比較的多く収められているのである。

「ブルーストッキング」のサークルというのは、その文学・学問に対する関心の高さによって知られた、18世紀後半の知的女性たちのグループに与えられた名前である。彼女たちは、Samuel Johnsonのような当代の著名な文人たちを招いた夜会で、トランプ・ゲームなどは禁止して、もっぱら文芸の世界に関わる談話をたのしんだ。このグループに含まれる女性たちは、比較的有閑階級に属するElizabeth Montagu, Elizabeth Carter, Catherine Talbot, Elizabeth Vesey, Hester Chaponeたちの第一世代と、中流階層のHannah MoreやFanny Burneyの第二世代というふうに分けられる。そして、これらの女性たちの先駆者として貴族階級のLady Mary Wortley Montaguの存在を位置づけると、おおむねその全体の人物関係図ができあがる。

「ブルーストッキング」の名前についてよく知られた由来は、次のような話である。Elizabeth Montagu夫人たちの催す夜会によく出入りしていた

講演中の坂本武教授（平成14年11月29日）

変わり者の学者でBenjamin Stillingfleetという人物は、絹の黒靴下の代わりに労働者階級が履くような青いコットンの靴下を履いて現われ、談論風発をしては皆を楽しませていたらしい。ある時この人物が欠席すると、皆が残念に思って「あのブルーストッキングはどうしたのだろう」とその不在を惜しんだという。James Boswellは、その『ジョンソン伝』の中でこうしたエピソードを紹介している。この名前はやがて一人歩きして、そうした夜会に招かれた当代の文人たちというイメージからはなれて、もっぱらそこに集う女性たち、あるいはその夜会を主宰する女性たち自身のことを指すようになった。*OED*によれば、Johnsonの周辺にいたBoscawen提督が、彼女たちの集まりを‘the Blue Stocking Society’と呼んだという。（このBoscawen提督夫人その人も「ブルーストッキング」の一人とみなされている。）そして彼女たちの呼び方も、最初期の1750年代には‘Blue Stockingers’や‘Blue Stocking Ladies’と言ったが、

1790年頃になってこの言葉の起源もほとんど忘れ去られていくと、ただ‘Blue Stockings’とのみ略称され、のちには俗語で‘Blues’と短く呼ばれた。

この名前に初めから付きまとっているのは、どことなく侮蔑的な印象である。‘bluestocking’について*OED*は、「女性一般について言うばあい」と注記して、「文学趣味をもっている女性、あるいはそのことを衒う女性」というふうに定義を下している。この侮蔑あるいは「からかい」の印象は、男性優位の18世紀英国社会のイメージと表裏一体のものである。つまりこの名前は、男性中心の社会制度が女性たちの知的活動にたいして抑圧的に働いたことを象徴しているといってよい。こうした状況下にあったために彼女たちの評価は、従来決して高いものではなかった。むしろ不当に低められていたといっても言い過ぎではない。

しかしながら、じっさいに彼女たちの著作と経歴を見てみると、男性の理解者に支えられたり、あるいは男性にたよらず独立した生活をいとなんだりして、十把一絡げに「男性による抑圧対女性の被抑圧」という図式にまとめられるものではない。

## II

ブルーストッキング（以下、かぎかっこ省略）の女性たちの世代的区分は上に示したところだが、もう一つの捉え方として、著作を残した夫人たちとサロンの女主人に止まった女性たちという、二つのタイプに分けることができる。

サロンを主宰してもっぱら文人たちとの談話を楽しみ、自らはものを書く（書簡類は別として）ということをしなかった女性たちのほうがサロン文化のイメージとしては一般的であろうが、その中心的存在としてMrs Veseyがいた。一方著作によって名を残したのは、Mrs Montagu，Elizabeth Carter、そして第二世代のHannah More，Fanny Burneyなどがいるが、その中心人物であり、またブルーストッキング全体の中心人物でもあったのは、人をひきつける知的な会話とサロンでのもてなしの魅力で知られたMrs Montaguである。彼女こそ‘Queen of the Blues’と呼ばれたその人である。

このうちHannah Moreは、ブルーストッキングの女性たちの全般的活動を一編の詩にまとめて、先輩の夫人たちに敬意を表した。“The Bas Bleu”(1786)「青い靴下」というその詩はブルーストッキングの小史をたどる内容となっている。

詩の始めは、当時のサロンでおこなわれた「トランプ」ゲームの‘Whist’や‘Quadrille’の名をあげて、それらがブルーストッキングの女性たちには‘Hun’や‘Vandal’と同然の野蛮なものと見なされ、これらの「改革」に乗り出したのが、‘Conversation’の女神であると唱える。夜会での談話を主宰するサロンの女性たちの背後に何らかの「神性」をイメージしたのが、注目される。そして詩は、ブルーストッキングの女性たちのそれぞれの活動について簡潔な表現を与えながら、Mrs Vesey、Mrs Boscawen、Mrs Elizabeth Montaguらを中心にした夜会の様子を描いてゆく。

その夜会に出入りする人物たちの多彩さは、18世紀の文壇の縮図をなすといってよい。例えばHorace Walpoleについて、

> 洗練されたウオルポウルは、才人たちに学問のある人間ともなり、
> 同時に人を楽しませる人ともなる道を教えた。
> (p. 293, ll. 7－8)[1]

という。8行目のもとの詩は、‘How wits may be both learn'd and gay!’である。ここに言う‘learn'd and gay’という表現は、「楽しませつつ、教える」という、18世紀英文学に限らず、そもそも文学というものの基本的な働きを示す標語である。同時にこの詩句には、‘learned wits’「機知ある才人」という、SwiftやSterneあたりまで続いたというヨーロッパの文学的伝統――学識と才知をおりまぜた笑いの文学――の存在をも暗示している。

この後に出てくる人々は、エピクテートスの翻訳で知られたElizabeth Carter、ヴォルテールのシェイクスピア論に対する反論として「シェイクスピアの天才」論を書いたElizabeth Montagu、当代のシェイクスピア俳優David Garrick、建築改修の流行児ともてはやされた‘Capability’ Brown、文壇の大御所であり、「文学クラブ」の中心であったDr Samuel Johnson、そしてそのクラブに出入りしていた思想

[1] British Library所蔵 *The Works of Hannah More* [A New Edition, with additions and corrections, in eleven volumes] (London: T. Cadell, 1830), Vol. Iに拠る。Cf. Walter Sidney Scott, *The Bluestocking Ladies* (London: John Green, 1947).

家Edmund Burkeなどが、「今はなき」人々として惜しまれる。この中でブルーストッキングの女性たちにとっては畏怖の対象であったらしいドクター・ジョンソンについて著者が、‘rigid CATO, awful Sage! / Bold Censor of a thoughtless age’といっているのが面白い。‘Cato’はローマの将軍で政治家の「大カトー」か、あるいはその曾孫でストア学者でもあった「小カトー」の、いずれのイメージをも利用したものであろう。厳格で恐ろしげなジョンソン博士という存在は、また時代の「検閲官」でもあったというHannah Moreの見解は、その時代の現状を「無思慮な」（thoughtless）ものと見る判断力とともに、ブルーストッキングの女性たちの「時代」に対する認識をも反映しているであろう。

「青い靴下」の最後のスタンザでは、「カンヴァセイションの女神」へのオマージュが直接的に表わされる。そしてその女神への「供物」が次のように半ばユーモアをもって描かれる。

カンヴァセイションの女神、慰めの神をほめ称えよ！
社交の時を宰領するかわいい女神よ！
…
貴女への礼拝が永く栄えてゆきますように
貴女の真実の崇拝者たちが絶えることがありませんように
洗練された貴女の祭壇にろうそくの光が輝きつづけますように
貴女へのささげものが夜ごと絶えませんように
レモネードのお神酒が大瓶にいっぱい
銀の瓶には盛りだくさんのビスケット
喉をうるおす冷たいハタンキョウの
乳白の水も忘れられませんように！
紅茶から上がる香しいかおりよ
えもいわれぬ芳香よ、立ち昇れ！
それこそ貴女にふさわしいものだ！[2]

ブルーストッキングの夜会が、古代ギリシャの饗宴さながら華やかに推移した様子がウイットとユーモアをまじえて描かれている。改めていえば、この詩に登場する人物群像は、そのまま18世紀の文学シーンを象徴する文人たちであった。ブルーストッキングの会員たちは、本来はジョンソン以下の文人たちだったわけで、Mrs Montaguは、その夜会に招いた男性客を‘bluestocking philosophers’と呼び、そのサロン風景を‘rational entertainment’（理知の宰領する歓待）の場と呼んでいるほどだ。しかし、70年代の半ばにはその呼称のなかに夜会の女主人たちが意図されるようになり、それとともにその評価が下降線をたどったことは先に指摘したとおりである。

このことは、Hannah Moreの詩にみる華やかで繊細な感受性（センシビリティ）と関係するかもしれない。というのも、18世紀的「センシビリティ」の潮流は、時代の進行とともに社会的批評の（主に男性の側からの）対象とならざるを得ない弱点をも暗示しているからである。

Bridget Hillの*Eighteenth-Century Women*は、18世紀の女性たちの様々な分野での発言を集めたアンソロジーであるが、その第三部「女子教育」の項に次のようなブルーストッキングの女性たちの社会的存在意義の限界点を指摘した一節がある。

「ブルー・ストッキングと呼ばれた婦人の集まりについて触れなければなるまい。会員たちは、自分たちには男性と対等に議論を交わす能力があると主張しただけでなく、彼女たちのサロンでその能力を誇示して、その学識と機知に富む会話は広く世間の注目を引くようになった。本書に登場する女性の多くは、レイディ・メアリ・ワートリ・モンタギュ、エリザベス・モンタギュー夫人、シャポーネ夫人、キャサリン・マコーリ、ハナ・モアのようなブルー・ストッキングの会員であった。彼女たちは全員、女性としては例外で、すぐれた学者もいた。貴族の娘というよりはむしろ成功した中流階級の出で、法曹や医師や商人や牧師の娘だった。主として、家庭教師についたか、独学したかである。彼女たちは、当時流行した寄宿学校の教育というものを手ひどく批判しただけで、その水準を高めるのになんら実質的な寄与はしなかったのである。彼女たちの中で社会における女性の役割を全面的に問題にした人はわずかに過ぎなかった。作家であり、著述家である人たちでさえ、自分たちが女性であるがゆえに与えられた、男性より劣った地位を喜んで受け入れていたようだ。彼女たちのほとんどは、限られた範囲で自分たちが認められていればそれで十分だったのである。」

[2] *Ibid.*, p. 299, ll. 27-28; p. 300, ll. 7-17.

（福田良子訳『女性たちの十八世紀』みすず書房、1990年）

Bridget Hillの指摘の重要さは、ブルーストッキングの会員の最初にLady Mary Wortley Montaguの名前

**Lady Mary Wortley Montagu**
〔Isobel Grundy (ed.), *Selected Letters* (Penguin Classics)より〕

をあげていることである。さらに、女子教育にたいする会員の女性たちの、貢献の度合いの低さを明らかにしていることである。Lady Maryの位置づけは、彼女の活躍した年代（1689－1762）から言っても、またSwiftやPopeらとの親交のあった経歴から言っても、ブルーストッキングの「先駆け」的存在であった。同じことは、Swiftとも関わりがあり、またElizabeth MontaguやHester Chaponeとも親交をむすんだMary Delany（1700－88）についても、またもう一人、Lady Maryの友人であり、「イギリス最初のフェミニズム理論家」という評価もあるMary Astell（1666－1731）についても言えるであろう。Astellは、その「結婚論」（*Some Reflections on Marriage*, 1700）で女性が不幸な結婚をさけるためには適切な「教育」が必要だと主張し、また晩年には年金生活者の子供のための学校を設立するなど、注目すべき活動を行っている。

Hillの指摘した後半の問題点は、そのままイギリスにおける女性の社会的位置づけの問題を、つまりはイギリス近代のフェミニズム（女権拡張論）以前の初期状態を暗示しているものである。というのも、彼女たちの時代はフェミニズムの思想が社会的パワーを持つにいたるにはまだ未成熟の時代だったからである。イギリスにおけるフェミニズムの起源を画したMary Wollstonecraft（1759－1797）の*Vindication of the Rights of Woman*（『女性の権利の擁護』）が出版されたのは1792年のことであり、女性の権利が承認された象徴としての婦人参政権の獲得は、19世紀末の三次にわたる選挙法改正を待たねばならなかったのである。

しかし、フェミニズムの歴史というものを女性の「自己表現」の歴史というレベルで考えるならば、ブルーストッキングの女性たちはその歴史の始原的存在として十分自己主張できるであろう。彼女たちの知的活動は、フェミニズムのいわば胎動期を形成していたといって過言ではない。その胎動期は、先駆けとしてのLady Maryから第二世代のHannah More, Fanny Burneyにいたるまで、18世紀全体を覆って19世紀にまで及んでいる。その呼称に侮蔑的な響きは避けられないものがあったとしても、また、彼女たちの活動範囲が限られた世界であったとしても、さらにその発言が男性優位の社会に（Mary Wollstonecraftのように）異議申し立てをするようなものではなかったとしても、彼女たちの自己表現の多彩さと豊かさは、われわれの再認識を迫るものである。例えば、宗教的小冊子（*Cheap Repository Tracts*）を大量に書き続けたHannah Moreなどの発言は、社会的発言以外のなにものでもない。

## III

ブルーストッキングの女性たちを社会的存在として意味あるものとしているのは、彼女たちの友情と支援の関係であろう。その具体例としてElizabeth Carterをめぐる三人のブルーストッキングたちの話をとりあげてみよう。

Elizabeth Carterは、エピクテートスの翻訳で知られた、ブルーストッキングの中では異例の古典学者である。1717年、ケント州ディールの生まれで、父のNicholas Carterはそこの代理牧師をしていた。母親はエリザベスが10歳のときに亡くなっている。エリザベスの教育を受け持ったのは聖職者の父親で、その指導は厳しかった。それについていくため彼女は深夜まで古典語・現代語の勉強をした。睡魔と戦おうと、かぎタバコをすい、緑茶・コーヒーをのみ、さらにはみずからの鳩尾に冷たいタオルをあてがって眠気を払ったという。その甲斐あってギリシャ語

を習得し、フランス語も流暢に話した。また、イタリア語・スペイン語・ドイツ語・ポルトガル語・アラビア語を独学で学び、語学以外にも天文学、古代・近代史、古代地理学などにも関心をもった。このうちの天文学の家庭教師を通じて知り合い、終生の友情関係を結んだ相手がCatherine Talbotである。

父のニコラスは、*Gentleman's Magazine*の主筆であるEdward Caveの友人であった。その関係で、エリザベスは16歳のとき（1734年）この18世紀を代表する雑誌にはじめての文章を載せてもらった。さらに、同誌の記者をしていたSamuel Johnsonの知遇をも得て、その*Rambler*誌に二編のエッセイを書かせてもらっている（nos. 44；100）。また、当時の有力な出版者であったRobert Dodsleyが出した詩集（1758）の中に、エリザベスの四篇の詩が収められたが、そのうちの一編、'Ode to Wisdom'は、Samuel Richardsonの*Clarissa*に無断で借用されたという逸話がある。

このRichardsonを間にはさんで、Catherine Talbotとの親密な交流を語る話がある。この三者はじつは親交があり、リチャードソンはその代表作の一つ、*Sir Charles Grandison*を書くときその筋の展開についてエリザベスとキャサリンの二人のブルーストッキングと熱心に議論をし、この小説の出版の前に二人にその一部を読んでもらったという。名作の生まれる現場に彼女たちは立ち会っていたわけである。

エリザベス・カーターの代表作は、エピクテートスのギリシャ語からの翻訳、*Moral Discourse*であるが、この出版にさいしても親友キャサリンの強い支持と援護があった。この翻訳は、1749年から始められ、1758年、予約出版の形で刊行された。賛同者から寄せられた金額は、千ポンド近くに上った。

エピクテートスの箴言集は、当時も人気があったようで、例えば世界文学のなかでも奇書と言われるLaurence Sterneの*Tristram Shandy*の扉にはエピクテートスからの箴言、「行為にあらず、行為に関する意見こそ、人を動かすものぞ」が飾られている。そしてエリザベスの翻訳は今日もなお、その歴史的意義を失ってはいない。

エリザベスは、生涯独身を通して、父親の家を守った。こうした彼女にたいして小額ながらも「年金」を配慮してやったのが、「ブルースの女王」Elizabeth Montaguである。一方、健康にめぐまれなかったキャサリン・トールボットは、不幸にして1770年、49歳の時に癌で亡くなった。エリザベスは彼女のために、終生の友情への返礼として、キャサリンが生前に書き溜めていた宗教的・道徳的文章をただちにまとめて、*Reflections on the Seven Days of the Week*（1770）を出版した。古典学者として非凡な存在であったエリザベス・カーターは、平凡なdomesticityをたのしむ人として1806年まで生きた。

## IV

エリザベス・カーターとキャサリン・トールボット、そしてエリザベス・モンタギュの友情と支援の逸話は、ブルーストッキングの女性たちの間の親密なネットワークの実態を物語る話であるが、ブルーストッキングという呼称の範囲の区切り方については、広義と狭義の二様があることを最後に確認しておきたい。狭義としてのブルーストッキングは、「ブルースの女王」Elizabeth MontaguやElizabeth Veseyの夜会の文芸サロンを中心とした人間関係のなかで捉えるべきであろう。

しかし、これらの女性たちのサロンに集まった男性の文人たちも基本的にはこの呼称において認められていたのであり、また、書き物を著さなかった婦人たち（Mrs Vesey, Mrs Ord, Mrs Boscawen, Mrs Crewe, Miss Mary Monktonなど）も認められるなど、その活動の形態からして、人の出入りの多い、いわば「開かれたサロン」のイメージが最初から与えられている。従って「広義」のブルーストッキングというイメージも自然に認知される性格のものであり、例えばSamuel Johnsonを食客として厚遇したスレイル夫人ことMrs Piozziもブルーストッキングであり、Laurence Sterne夫人、エリザベスもまたこの名でよばれる。（Sterneはまた、他ならぬMrs Veseyと温泉町バースで浮名を流した作家だった。）

総じていえば、ブルーストッキングの女性たちとは、18世紀の全般にわたって、知的関心を高く持し、男性作家に伍して文芸の世界に自己を開放しようとした女性たちを象徴する呼称なのである。フェミニズムの観点からは、Mary WollstonecraftやCharlotte Smithなどのようなラディカルな自己表現はしなかったが、女性の全般的なリテラシーの開発のためには大きな流れを作った存在として高く評価してよいであろう。彼女たちの読み直しの時機が到来していることは間違いない。

（さかもと　たけし　文学部教授）